

山に親しみ山に想う(47)

一檜原村の山々を訪れた人― (15)

(岡本 記)

山に親しみ山に想う(47)―(7)で田部重治の「数馬の一夜」について書いた。田部の他に檜原村の山を訪れた人として他にどんな文人登山家がいただろうか。大島亮吉、尾崎喜八、木暮理太郎ら3名(注)をあげ得る。他に幾人も居るかも知れないが、寡聞にして知らない。

現在では檜原村にある奥多摩三山(三頭山、大岳山、御前山)は、電車、路線バス等を利用して接近し、登攀後に日帰りできる。しかし上記四名の時代には、三頭山登山でも相應の覚悟をもってしても予想外の苦汁を舐めた。往時の登攀はどんなコース、コースタイムだったのか興味津々である。以下で大島、尾崎、田部の各山行寄稿文を元に探ってみる。

大島は友人と二人で大正7年(1918)9月に三頭山を登頂した。大島の山行紀行「三頭山」は母校慶應の山岳部会報「登高行第二年」に掲載された。不分明な道と藪、荆棘に悩まされており、現在では考えられない苦闘を味わっている。



9月5日9時、八王子駅に到着し、13時に秋川の谷本郷(注 本宿か元郷か、八王子から谷本郷まで歩いたようだ)に着く。残暑厳しく埃っぽい道がギョウつき眩しい日である。北秋川沿いに遡り時坂峠の山稜から浅間嶺に登る。最高点934m付近では富士山を仰ぎ見、樹林に蔽われた三頭山を眺望する。南秋川の谷まで下って谷底の数馬にある宿屋には既に薄暗い19時に到着する(注 数馬分岐か数馬峠(藤原峠)の何れかから下ったのだ

ろう)。宿屋(注山崎屋、現在数馬に6軒の宿があるが、山崎屋は既に廃業)は大きな農家の副業である。背負って来た米を炊いてもらう(注 数馬では米は貴重なので食べたいなら携帯するのが普通だった)。夜は蚤のため寝苦しい。宿の息子より、三頭山の登り口について、1年程前に炭焼が南秋川の源流を遡って入ったから道は途中まであるらしいが、藪が敷しいこと、また十幾丈(注1丈は約3m)の瀑布があるとの情報を得る(注登山ガイド本はなく、地元ガイドが必要な時代)。

翌6日6時に宿を出立する。その際、残った持参の米一升を宿に呉れたら、宿賃はいらぬと受け取らなかつた。

大平(注 九頭龍神社近くの平坦地の集落)を過ぎて、小河内に通じる峠道を約30分登り、雑草の中に「三頭山登山道」の道標をみつける(注 現在の都民の森バス停方向に進んだのだろう)。ひどい藪中、僅かにある道痕を辿る。すぐに道痕は消える。荆棘で甲が裂かれる。水源がなさそうなので時間のロスを承知で尾根筋から南秋川の源流三頭沢に下る。8時に沢を遡行する。十丈以上の瀑(注落差33mの三頭大滝か)の傍を登る。瀑の上に炭焼小屋と窯の残骸を見つめる。三頭沢の水が尽きて更に登る。12時に緩傾斜の頂上にある三角標を雑木林の中につける。森林で展望はない。田部氏の紀行にある毀れた神社は見当たらない。下山は、小仏に続く長い山稜から僅かに行き、原の村へ派生する山陵を下る(注 笹尾根の西原峠からの枝尾根筋を下ったのだろう)。途中から径があったが、藪や荆棘に苦しめられる。原に下って茶屋で休んだのは15時で、原からは鶴川に沿って

上野原発 19 時 40 分の上り列車に間に合うように急ぐ(注 現在上野原駅まで路線バスがある。この日は 6 時から 19 時 30 分程までの 13 時間以上の強行軍だった。列車に乗れたかどうか、紀行文には言及がないが、多分乗れただろう)

尾崎は昭和 5 年(1930)1 月 3 日に友人と二人で御岳山、大岳山を登頂した。「新年の御岳・大岳」と題した寄稿文は、報知新聞(昭和 5 年 1 月 14 日～18 日)に掲載された。

3 日 13 時 30 分に立川行き省線に乗り、立川で青梅鉄道に乗り換える。14 時 30 分立川発、15 時 20 分に終点御嶽駅に着き歩く。幾つもの小橋を渡り、最後の集落滝本から老杉の並木道である急勾配を上る(注 駅からの乗合バスやケーブルカーは無かったのだ)。丁目石があり、神社本社まで 22 町である(注一町は約 109m)。15 丁目の「中の茶屋」(注今は茶屋跡の目印があるのみ)で持参の餅を焼いてもらう。17 時 30 分に御師の家に着く。御岳山上の夜は寒気まことに鋭いが、人の心は純粹でまた温かい。

翌 4 日 8 時に出立、神社本殿を拝し、背後より奥の院へ向かう。一尺から二尺の積雪がある。9 時奥の院に着く。大岳山に向かう途中、大岳山を望見して、「いかにも偉大に荒々しく美しい…豪宕な地殻のかたまり、…武蔵野に向かって咆哮している」と男性的な山だと褒める。大岳神社前の茶店に寄るが、主人は風邪で休業している。神社左手から頂上まで急な登りである。深雪で最も難儀する。10 時 40 分大岳山頂二等三角点に立つ。御岳神社から 2 時間 30 分かかる。頂上の西から南方向への視界は広大で、女性的な御前山、大菩薩連嶺、雲取山、富士山、丹沢山塊のパノラマを望見する。さらに、三頭山、浅間尾根を望み、その南秋川の渓谷上流に「人煙稀な平和な数馬の部落があることは、田部重治さんの「数馬の一夜」というあの瞑想的な文章で知った」と述懐する。

下山は神社前の茶屋を経て、北秋川の檜原村へ一散に下る。馬頭刈尾根との分岐を経る。モミ(樅)、ツガ(栂)、檜の伐採が盛んで、無残である。八割沢沿いを真南に下り、13 時に登山口の鳥居(注大嶽神社か)、八割に出る。八割よりは北秋川沿いに坦々たる東京府道を 3 里程東行して五日市の町に着く。

田部は 2 人の友人と 3 人で昭和 22 年(1947)6 月初め、多摩川本流の丹波山から南秋川の数馬へ踏破した。この紀行文「多摩川より秋川へ」は、田部著「山と渓谷」に収載されている。雑な予定では、氷川(注 奥多摩駅)まで電車(青梅線)で行き、氷川より乗合(注路線バス)で川野または小河内鉱泉まで乗り、その後は丹波山まで 4、5 里歩いて同泊、翌日は峠越えして数馬泊、その翌日帰京というものである。

実際には、氷川から乗合で川野まで行けず、手前の小河内鉱泉まで乗合で行き、歩く(注 小河内ダム建設で小河内村が埋没するまで温泉があった。随想(29)の「古書、奥多摩の「山村旅情」をご参照)。川野、鴨沢を経由して丹波山に着く。宿では山女の料理を賞味する。

翌日 6 里先の数馬を目指して出立する。多摩川(丹波川)の対岸にある藤尾から爪先上がりになる。狭い谷間を登って大田和峠(注大丹波峠か)に出る。小菅村川久保に着く。小菅川の河原に出る(注 小菅川は川野で丹波川と合流して多摩川に名前を変える)。鶴峠から出る流れ(注白沢川か)に沿って進み、鶴峠からは鶴川渓谷を下る。下りかかると、5、6 箇所で河原の石を除いて土を入れて水田を作る人々がいる。長作、飯尾を過ぎ西原村になる。原で数馬に続く峠道への尾根道に入る(注 笹尾根の西原峠を目指した)。この山道も峠まで馬鈴薯が植わっている。村人が肥えを肩で村から

峠まで1里半も運ぶのに驚く。峠から数馬の山崎旅館に着いた時にはとっぷり暮れていた。夕食は蕎麦、涼しく夏でも蚊はいない。

翌日は浅間尾根を通って帰ることにする。時坂を通った際に、36年前に木暮と初めて数馬へ行った時にここで野営したことを回顧する。本宿に着くと、直ぐに乗合が来て、吉祥寺へも馴染みの宿屋橋本屋にも寄らずに帰る。

大正前期、昭和初期、昭和20年代という往時の山行模様を各紀行文に典拠してコース、コースタイムを主役に描いてみた。時代を遡った山行ほど難事だったことがわかる。電車、乗合などの交通事情、山道の整備状況が往時の山行事情を規制していたことが窺知される。紹介した三つのコースは、現在では健脚であれば日帰りできるものかもしれない。しかし、視点を変えれば、往時の彼らの方が山行の興趣を我々よりも深く味得していたのは確かかなような気がする。

(了)

(注)

大島亮吉(明治32年～昭和3年(1899～1928))慶大卒、大正・昭和前期の登山家、西洋登山の思想技術を紹介、前穂高で墜死、著書は「山」「先蹤者」等

尾崎喜八(明治25年～昭和49年(1892～1974))京華商業卒、大正・昭和期の詩人・随筆家で山と高原の詩人とも称された、著書は「山の絵本」等、串田孫一らと「アルプ」創刊

木暮理太郎(明治6年～昭和19年(1873～1944))東大中退、明治・昭和前期の登山家、日本山岳会三代会長、著書は「山の憶ひ出」等

田部重治(明治17年～昭和47年(1884～1972))東大文科卒、法政大学等で教鞭、人生観照の登山姿勢と評価、著書は「日本アルプスと秩父巡礼」「山と溪谷」「わが山旅五十年」等

参考資料

「大島亮吉全集1紀行」安川茂雄他編集 あかね書房 1969年12月刊

「山の絵本」尾崎喜八著 岩波文庫岩波書店 1933年5月刊

「山と溪谷」田部重治著 萬葉出版社 昭和23年11月刊